

来る二月五日より十一日紀元節を最後として全國一齊に國民精神發揚週間行はる。次の記は縣で定められし週間行事である。

入營見送 御禮

日本固有の文化を發揚して東亞新秩序の建設に關する講話、講演會開催

一、國休明徴、國史顯彰、東亞新事態の認識を強化するため展覽會または映畫會開催

一、敬神崇祖の美風を作興し

て家庭行事として實踐せしむること。

するため集團的勤労奉仕作業、又は團体行進、武道大會等の開催

一、最終日たる紀元節には各市町村、學校、團體、工場で建國奉祝の式を舉げ、特に九時を國民奉仕時間として各家庭、職場で遙拜、奉祝せしむ。

感動の他無き……。

開業と共に事變下輸出產業の振興に力を入れて精神的に、獻身報國の實を擧ぐ可く産業結成し工場一心一体の活氣を奮起せしむ可く邁進中である。

報國聯盟の實を擧ぐ可く産業

振興に力を入れて精神的に、

獻身報國の實を擧ぐ可く産業

行慶自十二月一年四十和啓

農村中心主義の本体より都會中心主義へ移行され、勞力不足より農村疲弊の根因を成す恐れは無きにしもある。一喜一憂とはこの處これなり。

現代の國策本義として、この農業立國の立前より満洲農業移民として、民族の移動大陸發展へと着手し、着々と其の成績は上り得て鄉村計畫

若き乙女心は純情であり時代の流動に直に共鳴するだけに、華やかな生活に憧れ一生を土中に沈む者も數限りなき事は、世人もよく知り盡くしてゐるであらうが、やはり満洲同胞同題に至りても同様である。國策的重要性を語られる一二の條件を聞きしのみにて我れも／＼と徒らに憧れを以

一金七圓五十錢 中皇 誠君
一金五拾圓 下平 諦全君
村の銃後々援會へ寄附
寄附者
米國ハワイより
一金壹圓十錢 久保尻少年團
一金壹圓貳錢 上川路宮ノ前
一金五十錢 上川路金山少
以上御火の金を節約國防獻金

昭和十四年四月一日入會ス
キ兒童數左記之通ゾ
總入學兒童數百廿七人
內 譯
駄 科 哉六人
長ノ原 十九人
時 又 廿七人
桐 林 哉一人
上 川 路 十四人

(女子部員擔當)
二月十一日 紀元節
三月廿一日 春季皇靈祭
四月三日 神武天皇祭
四月廿九日 天長節
七月一日 農休み
七月十五日 祇園祭
八月十六日 益休み
十月十一日 小學校運動會
十一月三日 明治節

◎希望圖書募集
　　村立竜丘圖書館
希望圖書を募る！
良書を御推薦あれ！
一、記入事項（用紙隨意）
　　圖書名　著者名　定價
發行所　內容概要

謹賀新年
御料理 梅乃家
會席
電話六番
一、締切期日 二月十日
希望圖書は出来るだけ應有
者の意に副ひます。
一、届先（圖書館投書箱）
男女青年會愛友會圖書部員
郵送の場合は駄科下平勇宛

都會地への憧れも此處三四年前迄の、都會にさへ出されば何れかの職業があらむと、華やかなネオンの灯に憧れた危險性の含めるものにあらずして職場への道は開拓され、昨年の如き凶作收りては、生活補充への役割をなし得らるゝ点、時局の産める賜として感謝の念に堪へない。

態になりはしないであらうか
満洲へ！ 満洲へと農業移民
民或は少年移民として、或は
官吏生活として渡つて行かな
んとする迄には、誰人たりと
も相當な期間眞剣に考究する
であらう時、こうした工場生
活の状況を開き満洲に於ける
生活認識に欠けてゐたならば
何れを取るであらうや？ 親
兄妹の地を一步なりとも遠く
離れがたきが心情の常である
亦渡満した青少年の者とし
て自分が妻帯を望む折の勞苦
程は如何ばかりであらう。遠
隔の地より何回となく往復す
る費用のみにても莫大である
未だ歳月至らざるに、貴い基
本となるべき純益金の費消は

戰線に銃後に愛國の至情は益々發揮せられ「舉國一致」の煙語をモットーに總力戰下に結ばれ美はしき至誠はこゝにも現はれ村當局は感謝の外ない國防婦人會へ寄附
一金十五圓 竜丘生產組合
一金十五圓 竜丘信用組合
一金十五圓 竜丘電氣組合
一金十圓 今村 康郎君
一金十圓 岡村政代さん
一金五圓 原 榮さん
右慰問袋に使用す。
寄附者芳名
一金五拾圓 高木 關君
一金貳拾圓 後藤 元君
一金參拾圓 原 太一君
一金拾圓 木下 國二君
一金合圓 藤田與三郎君

學第六號 昭和十四年一年十七日 竜丘村長
保護者殿 入學届出ニ關スル件
左記兒童本年四月一日ヨリ卒
丘小學校入學可致ニ付來一日
廿八日迄ニ保護者ヨリ届出相
成度及通知候也
追而病氣其ノ他正當ノ理由ニ
依リ就學猶豫及免除ヲ出願ナ
ントスル者ハ醫師診斷書相添
保護者ヨリ本月末日迄ニ届出
相成度申添候
自大正七年四月二日生
至大正八年四月一日生

二、○九六、六一
計金
十四年度開館案内

我等の圖書館

- 團体貸出
- イ、農閑期 一二三四及十一月の各月六日夜
- ロ、農繁期 五月六日
- 七月一日、八月十二日夜
- 個人貸出
- イ、書間貸出
- (女子部員擔當)
- 一二三及十一月毎月一回
- 十六日午前中、四十二月毎月
- 月十六日午前中

だより ◻◻◻◻

書館——讀め良書!!

地も戦時下の長期建設を期し
色々と御多忙の御事と思われ
ます。我々も新しく迎へる昭
和正月に賀

お茶菓子は、當店の
ごらやき、きんつばを

時又 翁月菓子店

賀 正

祝 皇軍連勝

足袋、メリヤス、學生服、胖物類の
御用わ勉強の當店へ

田中屋 胖物店

漫言提

賀壽雄

況を月報として或は時報を通じて一般民衆に今後について決定さすべく折々に發表し、

小學校奉安殿建築工事収支調

謹賀新年

賀壽雄

つてみると、いざと言ふ場合に於いては唯心の迷夢のみにして行く者の余りにも少數なる点悲哀の極みである。(現
在自分も友人のを一人求めて
宜) 併し決して

一金一千九十六圓六十二錢也。總工費
此內_上支_出五五圓三三。工事沒計費及者皆